

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第184号

イザヤ 65:1

平成23年1月28日

ペルシャの王クロスの第一年に、エレミヤにより告げられた主のことばを実現するために、主はペルシャの王クロスに霊を奮い立たせたので、王は王国中におふれを出し、文書にして言った。「ペルシャの王クロスは言う、『天の神、主は、地のすべての王国を私に賜った。この方はユダにあるエルサレムに、ご自分のために宮を建てることを私にゆだねられた。あなたがた、すべて主の民に属する者はだれでも、その神がその者とともにおられるように。その者はユダにある「エルサレムに上り、イスラエルの神、主の宮を建てるようにせよ。この方はエルサレムにおられる神である。 エズラ記1:1-3

エズラはバビロンから上って来た者であるが、イスラエルの神、主が賜ったモーセの律法に通じている学者であった。彼の神、主の御手が彼の上にあったので、王は彼の願いをみなかなえた……エズラは、主の律法を調べ、これを実行し、イスラエルでおきてと定めを教えようとして、心を定めていたからである。アルタシャスタ王が、祭司であり、学者であるエズラに与えた手紙……エズラは、主の命令のことばと、イスラエルに関する主のおきてに精通した学者であった— エズラ記7:6、:10-11

ハカルヤの子ネヘミヤのことば。第二十年のキスレウの月に、私がシュジャンの城にいたとき、私の親類のひとりハナニが、ユダから来た数人の者と一しょにやって来た。そこで私は、捕囚から残るのがれたユダヤ人とエルサレムのことについて、彼らに尋ねた。すると、彼らは私に答えた。「あの州の捕囚からのがれて生き残った残りの者たちは、非常な困難の中にあり、またそしりを受けています。そのうえ、エルサレムの城壁はくずされ、その門は火で焼き払われたままです。 ネヘミヤ記1:1-3

こうして、私たちは城壁を建て直し……その高さの半分まで、継ぎ合わされた… ネヘミヤ記4:6

ローマのコンスタンティヌス帝がキリスト教に改宗した西暦四世紀から二十世紀の初頭までのほぼ千七百年間、聖書は西欧諸国で、神の靈感によって書かれた権威ある書として受け入れられてきました。しかし二十世紀から、聖書の信憑性に疑問を投げかけた神学論はじめ、マスコミや知的階級の攻撃によって、唯一真の神の書としての聖書の権威はひどく損なわれてきました。しかしそのような時代の到来を預言者たちを通してすでに予告しておられた神は、この世が否定することのできない多くの証拠をも用意しておられました。必要なときにこの世に真理が明らかにされるように、過去ご自分のご計画をイスラエルの族長たちに顕してこられた神は、世の終わりの昨今では、人間文明が生み出した工科学的技術を通して真理を顕しておられます。神の存在、力、奇蹟、預言、この世への神のご介入に懐疑的なこの時代に、医科学的、考古学的発見を通して、聖書に記されていることがいかに正確であるかが明らかにされてきていますが、二十世紀末にコンピューター工学の発展によって発見された数知れない「聖書の暗号」の存在はもはや偶然で済ますことはできず、神の言葉、聖書の信憑性を確実に裏づけています。キリスト教とユダヤ教が正典として共有しているヘブル語聖書の原典「マソラテキスト」には、アクロスティック（折句）はじめ古代修辞法が多く用いられていますが、驚くほど多くの「聖書の暗号」も織り込まれており、隠れた神のメッセージになっています。今月は、エズラ記、ネヘミヤ記を考察してみましょう。

「助け」の意の名のイスラエルのレビ族の祭司エズラが、バビロンからの第二次本国帰還団の指導者としてエルサレムに帰還したのは、ペルシャ王アルタシャスタの第七年、458BCE、第五（アヴ）の月のことでした。バビロンに七十年住んでいたイスラエル人のエルサレム、ユダの地への帰還は、ペルシャ王クロスの勅令によってすでに538BCEに始まり、第一次本国帰還団を引率した指導者ゼルバベル、祭司ヨシュア、預言者ハガイとゼカリヤの指導の下、エルサレム神殿再建工事が進められましたが、近隣のサマリヤ人らの執拗な反対によって妨害、中断された後、神殿が完成し、奉献されたのは516BCEのことでした。律法の筆写者エズラは王の多大な好意と援助を受けて、エルサレム、ユダの地の改革とユダヤ人の霊的刷新を、御言葉を伝え、実践させることで成し遂げました。捕囚の地からユダの地に帰還したユダヤ人の第一次帰還団にさかのぼる歴史とエズラ自身の献身がエズラ記に記されていますが、「スキップ・コード」とも呼ばれる「等距離文字列法 (ELS)」による聖書の暗号は、エズラ記の冒頭の聖句“フ・ハエロヒム・アシェル・ブイェルシャリム”「エルサレムにおられる神」から始まっています。この句の「エルサレム」の中のヘブル文字“ヨッド”から二十六文字間隔で文字を拾っていくと、この文脈の表面下に“イエフウ・イエシュア”「主イエス」が織り込まれています。これは、ペルシャのクロス王のエルサレム神殿再建の勅令の背後に、まさに神がおられたことを証しているかのようです。

さらにエズラ記7:6の「モーセの律法に通じている学者であった」の中のヘブル文字“メム”から二十四

文字間隔で文字を拾っていくと、「メシヤ」が織り込まれており、7:11では、「祭司エズラ」の中の文字“アイン”から百四十二文字間隔で文字を拾っていくと“イエシュア”「イエス」が織り込まれています。ここには同じ文字間隔で、モーセの箱船、あるいは、証（契約）の箱を意味する“ハトバー”も織り込まれており、筆写者（邦訳では「学者」）エズラについてのこの文脈の表面下には、イエシュア、メシヤ、箱船、確かに、イエスは私たちのメシヤである、救いの箱、私たちの忠実な筆写者（学者）というメッセージを見ることができるのです。

契約の神の御旨から大きくそれ、ヤーウェ礼拝の場、エルサレム神殿と自国を失ってバビロンに捕囚に連れられていったイスラエルの民は大きな痛手、犠牲と引き換えに、捕囚地でカナン人の異教徒たちの偶像崇拜から解放、聖められ、モーセの掟に戻ることができましたが、本国帰還後重要視されたのは言うまでもなく、神の言葉、掟に戻ることでした。律法に精通した筆写者であり、民に律法をひもとく役割を担わされた祭司エズラが、復興後のエルサレムにレビ人の祭司制による神殿礼拝の礎を築くため遣わされたのは、重大な使命を担ったことでした。同様に、イエス・キリストがガリラヤ地方で福音宣教を始められたのは、一宗教の教祖として新奇な教を興すためではなく、すでにユダヤ人が精通していたモーセの掟を正しく解釈し、民に実践させ、神に立ち返らせる必要があったからでした。エズラとネヘミヤがエルサレム、ユダの地に遣わされて、御言葉によるリバイバルが起こったように、その四百五十年後、キリストは父なる神の御許からこの世に送られて、すでに預言者エレミヤを通して成就が預言されていた新約をもたらされ、旧約で語られてきたことをご自身が完成させられ、西暦一世紀以降、聖霊の働きによって御言葉は全世界にもたらされることになったのでした。神の言葉、その方であるキリストが再びこの地上に戻ってこられる再臨によって始まる時代には、人々の心にこれら神の言葉、掟が書き留められることになるのです。このように、神の言葉の宣教者のひな型ともいえるエズラに言及した文脈の背後に、本物の御言葉の担い手キリストが暗号で入れられていることは偶然ではなく、神意なのです。

「主に慰められた」の意のネヘミヤはアルタシャスタ王に仕えていた信頼のおける献酌官でした。エルサレム神殿再建後、ときが経つにつれて神の掟が無視され国家復興への意欲が失われていたある日、エルサレムの城壁再建と、民を神ご自身と御言葉への従順に導く熱意に燃え、445BCE、ネヘミヤは第三次帰還団を引率してエルサレムに向かいました。ネヘミヤ記冒頭の1-3節の「**第二十年のキスレウの月に**」の中の二番目の文字“ヨッド”から四文字間隔で文字を拾うと“イエシュア”が織り込まれています。キスレウの月は、165BCE、ギリシャ、セレウコス朝の暴君アンティオカス四世・エピファネスの手からエルサレムを奪還し、異教徒によって汚された神殿を聖め、再奉献した出来事にちなんで「ハヌカの祭り」が祝われる月で、この例祭は、新約聖書でもヨハネの福音書10:22に「**宮きよめの祭り**」として守られていたことが記されています。キリストはこの例祭のとき、宮の中で「**わたしと父とは一つです**」と宣言されたことにより、冒瀆罪とみなしたユダヤ人たちによって、危うく石打ちの刑に処せられるところでした。ご自身を「神の宮」になぞらえられたキリストにとって、神の宮が建てられたエルサレムの平和、繁栄、安泰は、ネヘミヤが願ったように、大変な関心事でした。

ユダヤ教の解釈書「タルムード」は、ハヌカの祭りが八日間祝われるのは、再奉献のときに一日分の明かりをともし分量の油で、八日間も明かりをともし続けることができたという奇蹟に因むと記しています。このハヌカの祭りを特徴づける祭具は、「九枝のメノラー（燭台）」で、ほとんどのシナゴグ（ユダヤ教の会堂）に置かれている「七枝のメノラー」（七枝は創造の七日間を象徴）とは異なり、二枝多いのです。この祭りの間、毎日一本ずつのローソクがともされていき、九本目のローソクは“シャマシュ”「しもべのろうそく」と呼ばれ、他のローソクに点火するために用いられます。メノラーは伝統的に、外から見えるように窓際に置かれることになっています。ハヌカの祭りはモーセ五書に記されている「イスラエルの七つの主の例祭」に入っていないため、歴史的にはあまり重視されてこなかったのですが、最近、脚光を浴び始めているといえます。ハヌカがエルサレム神殿奪還の史実を記念するイスラエルの主権の復興を象徴する例祭であることから、今日のイスラエル国のパレスチナにおける主権復興への動きと趣旨を同じくするからようです。ハヌカの祭りの時期はちょうど西欧諸国のクリスマスの時期に一致することから、ユダヤ人家庭ではクリスマスの時期にハヌカを祝う傾向が定着してきていますが、このことに拍車をかけているのは、残念ながら世俗社会の営利主義のようです。

ネヘミヤ記4:6には、“ハコマー”「**城壁**」の中の文字“メム”から四十文字間隔で文字を拾うと、「メシヤ」が織り込まれています。また、12章には、第一次帰還団としてエルサレムに帰還した祭司とレビ人の系図が記されていますが、そのうちの5節の最初から三つ目の文字“メム”から始まって十二文字間隔で文字を拾うと、やはり「メシヤ」が織り込まれており、16節にも、二つ目の語の五番目の文字“ヘイ”から二十四文字間隔で文字を拾うと、「メシヤ」が織り込まれています。16節の二つ目の語は「主は覚えておられる」の意の“ゼカリヤ”でメシヤのひな型ですが、メシヤそのものではないのです。しかし織り込まれた暗号はメシヤの到来を予告しているかのようです。キリストが、ご自分の再臨直前の世の終わりのしるしとして挙げられた「**荒らす憎むべき者**」（ダニエル書11:31引用）はハヌカの祭りを思い起こさせ、メシヤによる主権復興の前に厳しい迫害が起こることを示唆したものであり、昨今の世界的な反ユダヤ主義の復興は再臨に近いことを物語っているようです。